

社会思想史学会第 50 回大会（於青山学院大学相模原キャンパス）

セッション「第二インターナショナルにおける 1905 年革命のインパクト」（2025 年 10 月 18 日 10:00-12:00）

世話人：佐久間啓（同志社大学・院、日本学術振興会特別研究員）・赤海勇人（東京大学・院、日本学術振興会特別研究員）

報告者：佐久間啓・赤海勇人・舟木隆之（千葉大学・院・非会員）

討論者：太田仁樹（岡山大学名誉教授、オンライン参加）

参加人数：約 20 人程度。

本セッションはちょうど今から 120 年前、つまり 1905 年に勃発した第一次ロシア革命が、第二インターナショナルの社会主義運動の理論と実践にどのような影響を及ぼしたのか、様々な視角から考察し、討論することを目的として、近接するテーマを研究する博士学生が主体となって企画したものである。この 1905 年革命の社会思想史的重要性は、しばしば 1917 年革命（第二次ロシア革命）の影に隠れてしまい、必ずしも強調されてこなかった。だが、当時鉄壁と思われていた帝政ロシアに亀裂が走った事件は、ロシアから東欧そして西欧の社会主義者にまで大きな衝撃を与えていた。当時の社会主義の理論と実践に対して 1905 年革命が及ぼしたインパクトとはいかなるものであったのか。本セッションでは、第二インターナショナルのロシア、ドイツ（ポーランド）、フランスの社会主義運動を研究している報告者三名による発表ののち、ロシアやオーストリアのマルクス主義を専門とする太田仁樹（岡山大学名誉教授、オンライン参加）を交え、さらなる討論をおこなった。

第一報告「ユーリー・マルトフと 1905 年革命：近年の再評価及び「ブルジョワ」革命に対する行動とその意義」において、舟木隆之（千葉大学・院・非会員）は、ロシアの革命家ユーリー・マルトフを取り上げて、1905 年革命におけるマルトフの行動指針とその背景について考察した。ソ連崩壊以後、ロシア革命史は大きな転換を迎え、様々な側面から革命を捉え直す動きが続いている。舟木報告は、これまでのロシア革命史研究におけるマルトフという人物に対する評価の変遷を踏まえながら、マルトフの思想の独自性と言える「革命的自治」という考えに着目した。その上で、マルトフの実践的活動の原点とも言える「ヴィルナ綱領」の影響について提議しつつ、1905 年革命時のマルトフの言動の意味についてロシア語の一次史料を用いながら論じ、近年再評価が進むマルトフが、1905 年革命において果たした役割を再考する手がかりを提示した。

第二報告「ローザ・ルクセンブルクの思想形成過程における 1905 年革命の意義：階級闘争の新しい形態としての大衆ストライキ」において、赤海勇人（東京大学・院）は、ドイツ/ポーランドの革命家ローザ・ルクセンブルクを取り上げて 1905 年革命のインパクトを強調した。すなわち、ローザはドイツ社会民主党の政治行動を支配していた革命的待機主義（いわゆるカウツキー主義）に抗する独自の新しい革命思想を作り上げていく過程で、1905 年

革命の大衆ストライキの経験から決定的な影響を受けていたのである。そこで赤海報告は、近年利用可能になった一連の新資料なども参照しながら、革命的待機主義に対する以前からの不満に由来している新しい革命思想の断片を、ローザが1905年革命をめぐる一連の著述活動をつうじて、「階級闘争の新しい形態としての大衆ストライキ」の主張へとまとめあげていく過程を再構成した。

第三報告「1905年革命後のフランス社会主義運動とその三つの選択肢」において、佐久間啓（同志社大学・院）は、1907年のフランス統一社会党・ナンシー大会における「融合」問題論争を取り上げた。党と労働（組合）運動はいかなる関係を構築するべきなのか。この「融合」をめぐる古典的问题は、1905年革命によって「直接行動」の再評価が進み、さらに1906年「アミアン憲章」によって労働組合の党からの「自律」が宣言された中で、あらためて議論の中心になった。本報告では、マルクス主義者のジュール・ゲード、コミュナールのエドゥアル・ヴァイян、そして革命的サンディカリズムのユベール・ラガルデルが登壇したナンシー大会の議論を整理することによって、それぞれの立場を垂直的「融合」、水平的「融合」、「併存的分離」として提示するとともに、フランスにおける1905年革命の影響を示した。

討論者の太田会員からは各報告者に向けて多くの有益なコメントがあった。とりわけ、1905年革命を契機に新たな革命思想を展開したマルトフ、ルクセンブルク、ヴァイянといった人々が、カウツキーのような正統派に代表される第二インター・マルクス主義の限界（壁）を突破するような地平に立っていたのかどうか、という観点から太田会員と報告者三名との討論がおこなわれた。フロアからも同様に、質問や有益なコメントをいただいた。舟木会員の第一報告には、マルトフは具体的にはどのような行動を「革命的自治」であると想定していたのか、という質問があった。1905年6月の戦艦ポチョムキン号の反乱に際して、マルトフは「市の支配権を奪取して自治を形成すること」を「革命的自治」だと見なしたようである。佐久間会員の第三報告には、ラガルデルと同時代の革命的サンディカリズムの思想家であるジョルジュ・ソレルとの関係について質問があった。ソレルがラガルデルに直接的な影響を及ぼしていた点にくわえ、ソレルの『暴力論』が本として刊行される以前にラガルデル創刊の『社会主義運動』誌に連載されていたという伝記的事実を紹介した。